

て有益な助言を頂いた。ここに記して感謝申し上げる次第である。

〔参考文献〕 1) ANON (2009) Thailand in Figures 2009-2010. Alpha Research, Nonthaburi, 950pp. 2) Chandrasrikul, A. *et al.* (2008) Diversity of Mushrooms and microfungi in Thailand. カセトサート大学出版会。バンコク。514pp. 3) 加茂皓一・Tiyanon, S. (2006)

熱帯人工林の在来種侵入に対する触媒効果—タイ東北部サケラートにおける調査から—。熱帯林業, 67: 25-33. 4) 倉島孝行 (2007) タイの森林消失。明石書店。東京。269pp. 5) 横田康裕ら (2008) 東北タイにおける有用郷土樹種の育成技術および経営手法の開発。海外の森林と林業, 73: 24-29. 6) 吉岡二郎 (1986) タイ国サケラート地区の森林土壌。熱帯林業, 7: 21-28.

図書紹介

沙漠を森に —温暖化への処方箋—

小島紀徳・江頭靖幸編著,
コロナ社, 220pp, 2011 (03), ¥3,000+税,
ISBN978-4-339-06620-3

本書は成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「アジア太平洋地域における乾燥地植林による二酸化炭素固定とバイオマス生産・転換(2008~2010)」の成果報告書です。

序章で気候変動、京都議定書、植林による炭素固定の意義と必要性、乾燥地を選ぶ理由が述べられ、続く2章で乾燥地植林で検討すべき水の特性や課題、事業やバイオマス生産のコストが評価されます。3章では、試験地である西オーストラリア州の概要、4章「乾燥地の植物生理とモデル化」では、「植物の生理と耐乾性」、「植物の生理特性から造林技術への展開」、このプロジェクトで採用したカマルドレンシス・ユーカリの生理が平易に記述されています。5章は、乾燥地の特性と樹種選択の過程、造林を行う上で必要な現地との協力手法、道路や苗

圃、灌漑などの基盤準備です。6章「環境改善技術導入」の、該当地域にある堅い不透水層(ハードパン)を火薬で爆破して植栽の場を改良する実験は圧巻です。7章は「発芽育苗技術」、8章は「オーストラリアでの育林技術」と成果報告が続き、9章「バイオマスエネルギー」と10章「炭素固定量と経済性評価」で気候変動緩和のための植林の意義と経済性評価に基づく分析や技術提言を行い、最終の11章「他地域への展開」で中国やインドをはじめとする砂漠化や塩類土壌に悩む地域への応用に言及しています。

本研究は、小宮山宏元東大大学長が始めた化学工学会・CO₂研究会に端を発するという記述からも解るように、広範囲の分野の方が参加しています。それだけに用語や概念の基礎的な解説や定義に始まり、実践とその経過が事実即して記述され、成果が分かりやすく書かれているのが新鮮です。手法や考え方は世界中のどこにでも通用するもので、造林学の参考書としても最適と思い私のゼミの学生に読ませることにしました。森林造成や持続可能な森林管理を目指す人には是非とも読んで欲しい本であると紹介します。(日本大学 桜井尚武)